



ちょっとそこまで ～お散歩日和 (名言編)～



この世に生まれるとは… チェスタトン



この世に生まれるとは、居心地の悪い世界に生まれることだ。
だからこそ、ロマンスも生まれる。

……G・K・チェスタトン



「この世の中に生まれた限り、様々な苦しみから逃れることはできない。」との主張なのでしょう。生きることは悩み苦しむことの連続であり、それを「居心地が悪い」と表現しているのだらうなと考えれば、少しずつつつまが合ってきます。

Love, like a river, will cut a new path whenever it meets an obstacle. (by Crystal Middlemas)

これは、愛の名言として必ず引用される言葉の一つです。「愛とは川のようなものだ。障害物に出くわすたびに新たな道を切り拓く。」という意味です。Crystal Middlemas が何者なのか分かりませんが、歌詞の一部なのではないかと推察します。秋元康の「川の流れるように」は、これをヒントに生まれたのではないかと勝手に思っていますが、「新たな道」と「ロマンス」とが同義と解釈すれば、巻頭の言葉よりもこちらの方が分かりやすいのではないのでしょうか。とはいえ、ロマンスとは何かと再び問われると、はて何かしらと？と一瞬ためらいますが、男女間の愛情によって紡がれる物語のことですから、当たらずといえども遠からずでしょう。

そもそも、生まれてから死ぬまで誰彼なく皆にちやほやされて、幸せ一杯夢一杯で過ごす人などいるわけがありません。もしあったとしても、それは他人の目にそう映っているというだけの話です。幸せに見える人も、それなりの不満や悩みがあるに決まっています。それに、例えば、皆から温かくされていたとしても、今度は天邪鬼になって逆らいたくなるという、屈折した心情が生まれるのが日常です。要するに、生きていることを実感するには、何故か、少々の抵抗や不足を感じるものが要るということです。「不幸こそ人生最大の調味料」と言えば言い過ぎでしょうか。その真意は、病気もせず生きてきた人より、健康に不安を感じながら生きてる人の方が「健康の有り難さ」は分かるし、家族の崩壊を経験した人の方が「家族団らん」の素晴らしさが分かるということだからです。

それら諸々を全てひっくるめても、個人的には、愛について語るなら、プラトンの「Love is a serious mental disease.」（恋とは重大な精神疾患である。）を支持します。ここで、「love」を「愛」ではなく「恋」と訳しているところがとても興味深いところです。

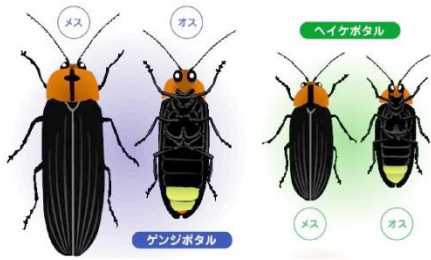
昔から「愛」は、真ん中に心があるから「まごころ」で、「恋」は「したごころ」と言いますから。

ところで、テレビで椿山荘の「ホテルの夕べ」の紹介がされていました。

このこの蛍のことで思い出すことがあります。以前、同じ職場の同僚だった人が、「私はここに来る前は新宿区の鶴巻小学校に勤めていたのだけど、そこは夜になると蛍が飛ぶんです。」と言い出したので、「そんな馬鹿な！さすがに神田川は蛍が生息するほどにはきれいじゃないよ。」と反論したことがありました。

結論を先に言うと、鶴巻小学校まで椿山荘の蛍が飛んできていたというオチでした。都会の真ん中の子の方が夏の風物詩に触れていたなんて、ちょっと悔しい思いをしたものです。

ついでに言うと、最近知ったのですが、ここ椿山荘の蛍は、毎年どこかから仕入れてきたもので、自前で飼育しているのではないそうです。



それに対して、今も続いていると嬉しいのですが、ここ練馬区では長い間、石神井公園の「ふるさと文化館」で蛍を飼育していました。前身の郷土資料室時代からずっと世話を下さっている方がいらっしやったのですが、ご高齢です。跡継ぎは育ったのでしょうか。しかし、なかなかそう簡単な話ではありません。

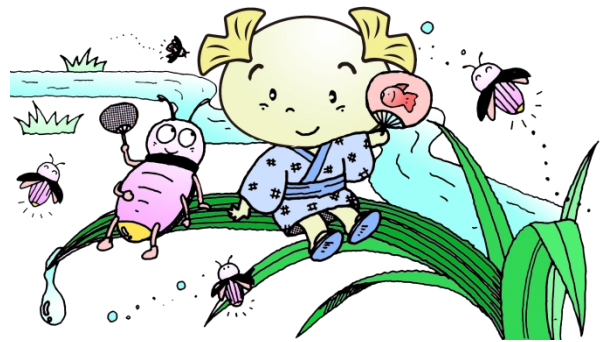
スタートはカワニナという巻貝の養殖から始めないといけません。水も当然ながら井戸水のような水温が保たれる湧水が豊富でなければいけません。ここまですら無理な話だとお気付きでしょう。

ちなみに、筆者が子供の頃でもう既に蛍を身近に見ることはできませんでした。蛍の群舞を初めて観たのは福島県常葉町の夏季学園に引率で連れて行った時でした。きれいではありましたが、そんなに騒ぐほどの感動はありませんでした。ヘイケボタルが主だったこともあるかもしれませんが、どちらかと言えば、「火垂るの墓」のイメージの方が先走っていたので、「なあんだ、こんなものか。」という感想になってしまいました。

このホテルに関して、巻頭の「居心地の悪い世界」にイメージが繋がる名句を紹介させてください。

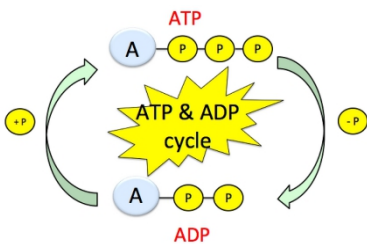
じゃんけんに負けて蛍に生まれたの (池田澄子)

まずこの俳句は擬人法に大きな特徴があります。作者の思いや考えを蛍の言葉で語っています。それに、句切れのない、ひとつながりの句になっています。途中で句点を挟むことなく一気に最後まで詠ませるとするのは、思いの外珍しいことだと思います。だから、誰もが自分事のように受け止めてしまうのでしょう。



筆者は、神も仏も全く信じてはいませんが、死ねば原子分子に分散するだけだと思っていますが、だからこそ、生命が無限に転生を繰り返す輪廻については理解も意識もしています。その意味で、冒頭の俳句はぐっと直球で迫ってきます。特に「じゃんけんに負けて」の一節が素晴らしいと思います。と同時に、果たして人間は勝って生まれているのかと反論したくもなります。

さらに言えば、じゃんけんそのものの勝ち負けにも意味はありません。意味があれば反発のしようもあるのでしょうか、意味がないという不条理さを包含しているがゆえに、一層「負け」たという得体の知れない意識だけが、当人に重くのしかかることになるのです。その意味のないものを背負って生きるというのが、つまり、人間の業ということなのだと訴えているように思えてなりません。



ところで、蛍の光についてですが、発光器内で発光物質が「ATP」と反応して励起状態になり、元の状態に戻ろうとして発光するのだそうです。敢えて、「ATP」という用語を使ったのは、高校生物の授業で、光合成反応を習ったときに何度も出てきたのを思い出して、懐かしかったからです。「アデノシン三リン酸」の略称です。重要なことは、これが化学的反応により発光していることにあります。

通常の、電球が発光する時は大量の熱が発生しますが、蛍に関してはそういうことはほとんどなく、冷光と呼ばれる、非常に高効率な発光システムだということです。誰かが言っていましたが、もしもこれを未来の光源に当てることができれば、エネルギーの効率化に繋がるはずです。

しかし、その光の冷たさが故に、負のイメージをもたらしているのでしょう。だから、冒頭の句が生まれることとなります。この光は生殖のシグナルであると同時に、外敵に嫌われるためという目的もあるようです。ということは、他の生物にとっては嫌われ者の光ということになり、除け者のイメージとも重なります。

それにしても、何度も繰り返しますが、自分好みの俳句です。

(終)